



Title	子どもと大人の会話
Author(s)	仲, 真紀子
Description	リレー連載: 言語獲得研究の新潮流 6 (最終回)
Citation	月刊言語, 32(12), 108-113
Issue Date	2003-12
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/44738">https://hdl.handle.net/2115/44738</a>
Type	journal article
File Information	GG32-12_108-113.pdf



子どもの言語獲得が、生得的・遺伝的に規定されていることは間違いない。獲得の開始時期や語彙カテゴリーの獲得順序、文法の発達の機序などは言語環境によらず普遍的である。しかし、野生児などの例をもちだすまでもなく、適切な言語的環境がなければ言語の獲得は遅れるし、どのような言葉をとどのように用いるかという、言語の運用にも言語的環境は大きな影響を及ぼす。親が我が子に提供する言語的環境には、どのような特徴があるのだろうか。また、それは他の大人（大人他者と呼ぶ）が子どもに提供するものとはどう異

## 言語獲得研究の新潮流

リ—連載

仲 真紀子

(なか まきこ)

6

(最終回)

# 子どもと大人の会話

なるのだろうか。ここでは私の研究室で行った調査や実験を紹介しながら、子どもの言語獲得や言語運用に影響を及ぼす大人の発話の特徴を見ていくことにする。

### 一 子どもと母親の会話

子どもに語りかける母親の言葉としては、抑揚の大きいマザーリーズ、「わんわん」「ブーブー」など音の重なりが多い育児語などがよく知られている。また、一般に、母親の子どもに対する発話は短く、文法的に単純で、繰り返しが多いとも言われる。では、特定の語の獲得に焦点を当てた場合、母親の言葉かけや応答にはどのような特徴があるだろうか。私

たちは一九九三年から一九九九年にかけて、2、3、4歳の子どもが母親との対話の中でどのように助数詞を獲得するのかを調査した (Zappella 1999)。助数詞とは、一枚、一本のように数とともに用いる接辞である。助数詞は指し示したり目で確認できる実体がなく、カテゴリーや形状による使い分けが必要である。習得はなかなか困難で、10歳頃までは誤用も多いと言われている (仲一光也)。

幼児は助数詞を対話の中でどのように習得していくのか。最初の研究は、食卓場面で録音された会話を素材とした、縦断的な事例研究であった。母親と2歳代の幼児の一年にわたる会話を記録し、その中でどのような助数詞が用いられているかを検討した。その結果、母親は大人他者 (夫) との間では、二〇種の助数詞を用いているのに対し、幼児には一年を通しわずか七種の助数詞しか用いていなかった。七種の中でも、特に頻繁に用いられたのは「回、個、つ」の三種である。母親は肉、野菜、味噌汁までも「回」か (もう一回食べる?)、「個」か (もう一個いる?)、「つ」 (もうひとついらない?) で数えていた。また、母親は初期においては「回」、次に「個」、そして「つ」へと、多用する助数詞を変化させていたが、二歳児もこれに対応するかたちで、用いる助数詞

を変化させていた。助数詞という語に注目した場合、母親は限られた種類の語を高い頻度で用いることにより、幼児にその語に接し、使用する機会を提供しているといえるだろう。

続いて行った横断的な研究では、2歳、3歳、4歳児と母親の計五〇組の母子に、数を教える課題に参加してもらった。第一セッションの課題は、母親が幼児に、皿 (枚)、クッキー (個、つ)、スプーン (本) 等を取るよう依頼するというものである。ここでは母親が幼児に対してどのような助数詞を用いるかを記録する (「〇ちゃん、お皿二個とって」では「個」など)。第二セッションでは、幼児にこれらの物を数えてもらう。ここでは幼児がどのような助数詞を用いるかを調べる。第三セッションの課題は、母親が大人の助手に、これらの物を取ってくださるようにお願いするというものである。これは母親が大人他者にはどのような助数詞を用いるかを調べるためであった (「すみません、お皿を二枚取っていただけますか」では「枚」など)。

その結果、母親は大人他者に対しては「枚、本」などの個別の助数詞を用いること、しかし幼児に対しては、限られた種類の助数詞を繰り返し用いることが明らかになった。2歳児の母親は皿もスプーンも「個、つ」で数えることが多い

「二ね、お皿とつて、二個、二個よ」。3、4歳の母親では「枚、本」の使用が増える。つまり、「個、つ」の使用は子どもの年齢とともに減少し、「枚、本」の使用は年齢とともに増加することが示された。

助数詞の種類と頻度に変化するだけではない。特に2歳児の母親では、「二本とつて、二個。そう、ふたつよ」など、一つの発話の中で指示を繰り返し、用いる言葉のカリブレーション(調整)を行う様子も見られた。また、第二セッションでの幼児に事物を数えさせる課題では、「これは何個?」「これは幾つ?」など、助数詞を含めた聞き方をする例も見られた。「何」や「幾」の部分に数字をいれて答えれば、いわば自動的に助数詞を使うことができる。さらに、母親が与えるフィードバックにも発達に応じた変化が見られた。例えば幼児がお皿を「二!」などと数えると、母親は「そう二個ね」など、一般的な助数詞「個」をそえて応答することが多い。「二個!」と数えると、「そうね、二枚ね」とさらに一歩引き上げるような応答をする。調査が終了するまで、母親はこれらが助数詞の研究であることを知らなかった。彼らはおそらく無意識のうちに、子どもの言語レベルにとって最適な発話や応答を行っているのだろう。

## 二 子どもと大人他者の会話

中国語では、日本語よりもさらに多くの種類の助数詞が用いられると言われている。私たちは同様の調査を北京在住の母子を対象に行つた(仲・金・陳一九九七)。その結果、中国語においても、母親は限られた種類の助数詞を高い頻度で用いることが示された。また日本語の場合と同様、「幾塊?」(何塊?)、「幾支?」(何本?)」等、助数詞を含めた尋ね方をすることも多かった。では、このような手がかりを取り除いてしまつたら、幼児の反応はどうなるだろうか。この調査では、大人の中国人助手が幼児に「多少(どれだけ?)」という表現で数を数えてもらうセッションを加えてみた。ひよいと実験室に入ってきた大人なら、子どもにそのような尋ね方をすることもあるだろう。その結果、子どものパフォーマンスは母親に対する場合に比べ、下がってしまった。適切な手がかりや助けがないと、幼児はその語を用いる機会を逸してしまう。

ところで、母親はこういった手がかりや助けをどの程度自覚的に使えるのだろうか。私たちは当初、母親が幼児の助数詞の獲得を導くプログラムのようなものをもっていて、それ

を必要に応じて実行するのではないかと考えていた。しかし、それでもなさそうであることが、次の調査から示唆された(仲三〇〇)。

この調査の被験者は、小学校以上の子どもをもつ、育児経験のある女性である。課題は、「今日は誕生パーティーです。

……お皿を三枚とスプーンを三本、もってきてください」といった文を与え、この内容を2歳児、4歳児、または6歳児に話しかける言葉に「翻訳」してもらおうというものであった。つまり、自分の子どもではない2歳児、4歳児、または6歳児に対して上の内容を伝えるという前提で、発話をつくってもらおうとしたのである。しかし、この課題はたいへん難しく、2歳児用に翻訳するよう求められた条件では、途中であきらめてしまう人さえいた。「枚、本」を「個、つ」に置き換える人もほとんどいなかった。先の実験では、母親は用いる助数詞の種類を難なく調整し、子どものレベルに見合った援助を提供しているように見えた。しかし、そういった発話は、あらかじめ用意されたプログラムによつてではなく、これまでの会話の履歴と、目の前にいる我が子によつて引き出されるものなのかもしれない。

このことは子どもと母親、子どもと大人他者のやりとりを

検討した次の調査からも示唆される。助数詞の獲得という問題からは離れてしまうが、千葉大学地図課題コーパス(言語の大規模資料)(堀内他一九九六)の一貫として収録された母子による地図課題コーパスの分析を紹介する(仲三〇二)。

このコーパスはエディンバラ大学HCCRC地図課題コーパスにならつて作成された。基本的な課題は以下の通りである。二人の話者の一人が情報提供者、もう一人が情報追隨者となる。提供者は出発点から目的地までのルートが描かれた地図を、追隨者は白地図を与えられる。互いの地図は見るこゝとができない。提供者は、出発地点から目的地点までのルートを言葉だけで相手に指示し、追隨者は提供者の指示に従つて、自分の地図にルートを書き込む。母子を対象とした地図課題コーパスでは、地図に描かれたいくつかの店を回つて買い物をする課題を用いた。

分析した資料は二組の母子(6歳児)、すなわち母1、子1、母2、子2から得られた会話である。この四人の組み合わせから、母1子1、母2子2、母1子2、母2子1、母1母2、子1子2のペアができる。各ペアは会話ごとに役割を交替するので、全部で一二の会話が収録された。これらの会話を子ども母親、子ども大人他者、母親同士、子ど

も同士の会話にまとめ、ターン数や発話文字数をカウントした。なお、母1、子1と母2、子2は初対面である。

大人が情報提供者、子どもが追隨者である場合を見てみよう。母親は自分の子どもに対しては、一会話中約三〇文字の発話を約三〇ターン行っていた。しかし、他人の子どもに対しては約四〇文字の発話が約二〇ターンである。総文字数は同じでも、母子間では短い会話が頻繁にやりとりされるのに対し、大人他者と子どもでは長い会話が少ない回数、交わされる。大人は他人の子どもに対しては説明が長くなる傾向があり、どこまで話せば相手が理解できるのか、うまく調整できないようであった。また、子どもの方も大人他者に対しては、母親と話す場合に比べ約三分の一しか発話していなかった。うまく指示ができない大人他者の発話を受けて、発話の産出量が下がってしまったのかもしれない。助数詞の場合にも見られたことだが、言葉を使うためには調整された手がかりや助けが必要だといえるだろう。

### 三 母親と父親の違い

同じ親でも母親と父親では提供する言語的環境は異なるのだろうか。私たちはこの比較をメモリートーク、すなわち過

去の体験や出来事を話す会話について行った。メモリートークは会話の一ジャンルとしてだけでなく、エピソード記憶や自伝的記憶の形成とのかかわりにおいても重要である。子どもは身近な大人に助けられて、どのような出来事を、どのような順序で、どのように話せばよいかを習得するといわれている。

この調査では、3、4、5歳代の幼児とその両親を対象に、親が子どもからどのように過去の体験を聞き出すかを調べた。日本人親子、中国人親子の資料を収集したが、ここでは公刊済みの中国人親子の結果を紹介する(金・仲 二〇〇三)。調査は母親、父親に「お子さんに、最近の楽しい出来事について話してもらってください」と教示して会話を録音してもらうというものであった。

会話時間ほどの年齢においても、また母親との会話でも父親との会話でも、およそ二〜三分であった。しかし、親が体験や出来事をどのように聞き出すかには、子どもの年齢差や母父差が見られた。まず、子どもの年齢が低いほど、親はたくさん質問をする。平均すると、3歳児には約二五、4歳児には約二一、5歳児には約一三の質問をしている。年齢が上がるにつれ、足場(スキヤフォルディング)を少なくしてい

くといえるだろう。また、母親よりも父親の方が質問数が多く(母親一九、父親二二)、その差は特に相手が4、5歳児であるときに多かった。3歳児に対する質問数は、母と父で差はない。しかし、4、5歳児の母親は質問の数をぐっと減らし、子どもにより多くを語らせるようになる。これに対し父親は、質問を減らしていく度合いが少なかった。子どもと接することの多い母親の方が、子どものレベルをうまく反映させた聞き出し方をしていて考えられる。父親とのメモリートーク、母親とのメモリートークにおいて子どもの語りなどのような違いが現れるかは、現在検討中である。

大人が提供する言語的環境が幼児の言語獲得や言語使用に重要な役割を果たすことは、かねてより指摘されてきた。しかし、母親の発話のどのような特徴が、特定の語の習得や言語的課題の達成にかかわっているのかについては、十分明らかにされていない。ここでは子どもと母親、父親、大人他者との会話を通じ、母親は限られた語を高い頻度で用い、幼児がその語に接したり、その語を使用する機会を高めること、それはコミュニケーションの履歴のない大人他者には難しいこと、同様の現象は他の言語課題においても見

られること、同じ親であっても母親と父親では与える手がかりや助けが異なることなどを示した。生みの親、育ての親である必要はない。しかし、長期間にわたり幼児と身近に接することのできる大人が、調整された言語的環境を提供していることが言語の獲得には必要だといえるだろう。

〔文献〕

堀内靖雄・中野有紀子・小磯花絵・石崎雅人・鈴木浩之・岡田美智男・仲真紀子・土屋俊・市川嘉(一九九六)『日本語地図課題コーパスの設計と特徴』『人工知能学会誌』四(三)、三三三-三三頁  
 金敬愛・仲真紀子(二〇〇三)『中国人親子による出来事の話』『母親と父親は幼児の出来事の話りをどのように引き出すか』『発達心理学研究』二二(一)、一三三-一三六頁  
 仲真紀子(一九九七)『対話における助数詞の獲得—語彙獲得における認知的要因と言語的環境要因』榎谷滋(編)『第二巻—ことばの獲得』二七-二八頁 ミネルヴァ書房  
 Naka, M. (1999) "The acquisition of Japanese numerical classifiers by 2-4-year-old children: The role of caretakers' linguistic inputs." *Japanese Psychological Research*, 41(1), 70-78.  
 仲真紀子(二〇〇三)『3歳と4歳—年齢というバイアス、理念と個人の姿—岡本夏木・麻生牛(編)『年齢の心理学』二二-三三頁 ミネルヴァ書房  
 仲真紀子(二〇〇三)『母親と子、大人他者と子、大人同士、および子ども同士の対話—資料の収集と予備分析—文部省科研費特定領域(A)』  
 『心の発達—認知的成長の機構—成果報告書』三三-四三頁  
 仲真紀子・金敬愛・陳萌華(一九九六)『中国人2、3、4歳児と母親、および母親と大人他者の対話における中国語助数詞の使用』『千葉大学教育学部研究紀要』17(1)、一六頁

(北海道大学／心理システム科学)